

## 中國小説史略考證第十

著者	中嶋 長文
雑誌名	神戸外大論叢
巻	44
号	1
ページ	1-26
発行年	1993-09-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00002094/">http://id.nii.ac.jp/1085/00002094/</a>



# 中國小說史略考證 第十

中 島 長 文

## 第十篇 唐之傳奇集及雜俎

### 1 造傳奇之文、以至有傳在兩『唐書』

九十一

寫印本『大略』は傳奇集と雜俎について一章を設けない。鉛印本九は「多有」を「亦多有」に作り、「本隴西狄道人、居宛葉間」を「隋僕射奇章公之裔也」と『唐書』に據る他は『史略』と變らない。

『新唐書』卷一七四牛僧孺傳云、牛僧孺字思黯、隋僕射奇章公弘之裔。幼孤、下杜樊鄉有賜田數頃、依以爲生。工屬文、第進士。元和初、以賢良方正對策、與李宗閔、皇甫湜俱第一、條指失政、其言梗訐、不避宰相。宰相怒、故楊於陵、鄭敬、韋貫之、李益等坐考非其宜、皆謫去。僧孺調伊闕尉、改河南、遷監察御史、進累考工員外郎、集賢殿直學士。穆宗初、以庫部郎中知制誥。徙御史中丞、按治不法、內外澄肅。宿州刺史李直臣坐獄當死、賂宦侍爲助、具獄上。帝曰、直臣有才、朕欲貸而用之。僧孺曰、彼不才者、持祿取容耳。天子制法、所以束縛有才者。祿山、朱泚以才過人、故亂天下。帝異其言、乃止。賜金紫服、以戶部侍郎同中書門下平章事。中略。會昌元年、漢水溢、壞城郭、坐不謹防、下遷太子少保。進少師。明年、以太子太傅留守東都。劉稹誅、而石雄軍吏得從諫與僧孺、李宗閔交結狀。又

河南少尹呂述言、僧孺聞黜誅、恨歎之。武宗怒、黜爲太子少保、分司東都、累貶循州長史。宣宗立、徙衡、汝二州、還爲太子少師。卒、贈太尉、年六十九。諡曰文簡。

『舊唐書』卷一七二牛僧孺傳云、前略。僧孺少與李宗閔同門生、尤爲德裕所惡。會昌中、宗閔棄斥、不爲生還。僧孺數爲德裕掎摭、欲加之罪、但以僧孺貞方有素、人望式瞻、無以伺其隙。德裕南遷、所著『窮愁志』引里俗犢子之識以斥僧孺、又目爲太牢公、其相憎恨如此。『窮愁志』は後に出る『周秦行紀論』つまり『李衛公外集』卷四のことである。なお、『新唐書』の

記述に照せば、『至考官皆調去』の「調」字は、鉛印本以來そのように作るけれども、『讀去』の「讀」字を誤植した可能性が大きい。

李珣「故丞相太子少師贈太尉牛公神道碑」『文苑英華』卷八八八云、前略。公諱僧孺、字思黯。隴西狄道人、本子姓、漢有牛崇爲隴西主簿、因家焉。代爲西州豪族。八代祖弘仕隋爲吏部尚書、封奇章公、佐佑文帝、有重名於時。中略。父幼聞華州鄭縣尉、贈太保。公七歲而孤、依倚外族周氏、嶽嶽卓卓有老成之風、以喪禮自處、未嘗戲弄。年十五知先奇章公城南有隋室賜田數頃書千卷。乃辭親肄習、孜孜矻矻、不捨晝夜。洎四五年業成、舉進士軒然有聲。時韋崖州作相、綱羅賢雋、知公名願與交。公袖文往謁、一見如舊。由是公卿籍甚、名動京師。得上第、聯以賢良方正舉、又冠軍科。策中盛言時事、無有隱避。持權者深忌之、出爲伊闕尉。後略。正史並びにその資料になったと思われる杜牧「牛僧孺墓誌銘」(『樊川文集』卷七)もともに籍貫を記さない。牛氏ほどの高官でありながらその籍貫を示さないのは珍しい例であろうが、『史略』が「隴西狄道人」とするのは、李珣の「神道碑」ないしはそれを引く『登科記考』卷十五に據るものと考えられる。牛弘の籍貫を「隋書」卷四九、「北史」卷七二の傳は「安定鶉觚人」とする。安定は唐では關内道で、「隴西狄道」の李珣の説とは合わない。兩『唐書』傳、「新唐書」宰相世系表並びに杜牧・李珣も皆な八代の祖牛弘に連なげるが、その間相當の時代が經っているので、李珣が「隴西狄道」としたのは何か根據があつたのかもしれない。それが何であるかは未詳だが、同時代人の「神道碑」の言うところであるため魯迅は「本」字を加えてそれになつたのだろう。

孫光憲『北夢瑣言』卷一云、相國牛僧孺、字思黯、或言牛仙客之後。居宛、葉之間、少單貧、力學、有倜儻之志。唐

永貞中、擢進士第、時與同輩過政事堂、宰相謂曰、埽廳奉候。僧孺獨出曰、不敢。衆皆異之。元和初、登制科、歷省郎、中書舍人、御史、中書門下平章事、揚州建州兩鎮、東都留守、左僕射。先是、撰『周秦行記』李德裕切言短之。大中初卒、未賜諡。後白敏中入相、乃奏定諡曰簡、白居易曰文。葆光子曰、僧孺登庸、在德裕之先、又非忌才所能掩抑。今以牛之才術、比李之功勲、自然知其臧否也。且『周秦行記』非所宜言、德裕著論而罪之、正人覽『記』而駭之、勿謂衛公掩賢妬善、牛相不罹大禍、亦幸而免。これも『登科記考』卷一五の引く所である。『史略』が「居宛葉間」と記す根據の一であるが、これは後に『史略』も引く、牛僧孺の名に托された『周秦行記』の冒頭に「余（牛僧孺）貞元年舉進士落第、歸宛葉間」という記述に據っている。杜牧がその墓誌銘で「公始自河南薦鄉貢士」と言うこともあるいは關係があるかもしれない。宛・葉の間とはいま河南省南陽近邊である。『北夢瑣言』の議論は魯迅が「神邊小綴」の「周秦行記」の部分で駁する意見の一なので全文挙げた。

『師弟答問集』一四頁云、「魯迅答曰、」②113頁、以賢良方正對策第一、地方ノ長官ニ賢良方正ナ人ト認メラレ京都ニ送り、試験スル片ニ策問ヲ答ヘテ第一人者トシテ及第ス。（賢良方正ニ舉ゲラレテモ落第スルコアリ、）増田譯注に、賢良方正について「地方官が推舉する、士をとる一方法」、對策について「策問を出してそれに對へさせる試験」とある。

## 2 僧孺性堅僻、以至因故示其詭設之迹矣

九二十七

『新唐志』小説家類云、牛僧孺玄怪錄十卷。

『郡齋讀書志』卷一三、小説類云、玄怪錄十卷 右唐牛僧孺撰。僧孺爲宰相、有聞於世、而著此等書、周秦行紀之謗、蓋有以致之也。

鉛印本と『史略』に異動はない。

『太平廣記』所引尙三十一篇、鉛印本から『三十年集』本に至るまで皆「三十三篇」とする。五七年版『全集』に至って「三十一篇」と訂された。趙景深「中國小説史略勘誤」（いま『中國小説叢考』所收）の指摘によるものだろ



う。中華書局本『廣記索引』(一九六二)では三十一篇を数える。なお程毅中『玄怪錄・續玄怪錄』(一九八三・中華書局)の「點校説明」によれば『廣記』卷四四二「淳于矜」は『幽明錄』の誤りということになり、『廣記』所引は三十篇に訂されねばならぬことになる。ただし魯迅の『史略』以後に明版の陳應翔刻本が発見され、それは『廣記』に見られぬ文も含んでいる。前掲の程氏の整理では合計五八篇を数えるが、陳刻本自體にすでに『續玄怪錄』の文章が混入していて、結局正確なところは分らない。陳刻本をもとに校勘整理したテキストには、他に上海古籍出版社版(一九八五)があり、中華書局版とともに卷末の附録に關係資料を集めている。

「六朝小説和唐代傳奇文有怎樣的區別？」『且介亭雜文』二集云、唐代傳奇文可就大兩樣了。神仙人鬼妖物、都可以隨便驅使。文筆是精細、曲折的、至于被崇尚簡古者所詬病。所叙的事、也大抵具有首尾和波瀾、不止一點斷片的談柄。而且作者往往故意顯示着這事迹的虛構、以見他想像的才能了。

3 『元無有』即其一例、以至所引『玄怪錄』

九一八

「觀、其自負」、「觀」字、孫刻、黃刻ともに「勸」に作る。抄宋本のみ「觀」に作るが、魯迅が抄宋『廣記』を見た可能性は少ないので、文意から「觀」に改めたものであろう。「乃明乃、歸舊所」、談刻、黃刻ともに「方」に作る。こは文字を改める必要がない箇所であり、鉛印本以來すべて「乃」に作るから抄寫の時の筆誤と思われる。また魯迅が省略した部分は、談刻、黃刻では「其一人即曰云云」に作り、通じない。ちなみに抄宋本は「其人即曰、口號連句也」に作る。さらに句讀の點では、新版『全集』は「未幾、見月中有四人」とするが、この「、」は鉛印本以來『三十年集』に至るまで附いていず、五七年版『全集』ではじめて附けられ、新版はそれを襲ったものであるが、ここに讀點を附けなければならぬ必然性はなく、鉛印本以來の舊に復した方がよい。「無有亦不以四人爲異、」のコンマは

鉛印本、初版ではセミクロン「;」であつたのが、合訂再版以後「;」になつた。

『師弟答問集』一四頁云、「魯迅答曰、」①山頁、  
「元無有」桑綆、ハツキリ云ヘナイ。桑ノ皮デ拵ラヘタ繩ト訳スル外、仕方ナイ、」答のみ残つていて質問の方は魯迅の手元に留めおかれたのか見ることができない。増田涉譯注に「桑綆。綆は釣瓶繩、桑は桑皮で作つた意であらうか。」とあるのは此を承けている。

#### 4 牛僧孺在朝、以至顧當時亦不行

九三十九

寫印本『大略』八云、與游仙窟近似者、有牛僧孺周奏當作案。行記當作紀。(廣記四百八十九)、自叙夜遇后妃異事、罪當作晃。公武(郡齋讀書志十三)云、賈黃中以爲韋瓘所撰、瓘、德裕門人、以此誣僧孺也。第八章の末尾の部分である。鉛印本は「韋瓘」を「衛瓘」に作る他は「史略」と同じ。「衛瓘」は「三十年集」までそのまま、五八年版全集ではじめて訂された。寫印本では「韋瓘」とし、「唐宋傳奇集」「稗邊小綴」でも二人の韋瓘について記しているところを見れば、この誤植はずっと見逃されていたのだろう。

『唐宋傳奇集』『稗邊小綴』云、「周秦行紀」余所見凡三本。一在『廣記』卷四百八十九。一在『顧氏文房小說』中、末一行云「宋本校行」。一附于『李衛公外集』内、是明刊本。後二本較佳、即據以互校轉寫、並從『廣記』補正數字。三本皆題牛僧孺撰。僧孺、字思黯、本隴西狄道人。居宛葉間。元和初、以賢良方正對策第一、條指失政、鯁訐不避權貴、因不得意。後漸仕至御史中丞、以戶部侍郎同中書門下平章事。又累貶爲循州刺史。宣宗立、乃召還、爲太子少師。大中二年、年六十九卒、贈太尉、諡文簡。兩『唐書』(舊一七二新一七四)皆有傳。僧孺性堅僻、與李德裕交惡、各立門戶、終生不解。又好作志怪、有『玄怪錄』十卷、今已佚、惟輯本一卷存。而「周秦行紀」則非眞出僧孺手。晃公武(『郡齋讀書志』十三)、云「賈黃中以爲韋瓘所撰。瓘、李德裕門人、以此誣僧孺」者也。案是時有兩韋瓘、皆嘗爲中書舍人。一年十九入關、應進士舉、二十一進士狀頭、榜下除左拾遺、大中初任廉察桂林、尋除主客分司。見莫休符

『桂林風土記。』一字茂宏、京兆萬年人、韋夏卿弟正卿之子也。『及進士第、仕累中書舍人。與李德裕善。李宗閔惡之、德裕罷、貶爲明州長史。』見『新唐書』(一六二)夏卿傳、則爲作『周秦行紀』者。胡應麟『筆叢』三十二云、  
「中有『沈婆兒作天子』等語、所爲根蒂者不淺。獨怪思黯罹此巨謗、不亟自明、何也。牛、李二黨曲直、大都魯、衛間。牛撰『玄怪錄』等、亡隻詞構李、李之徒顧作此以危之。於戲、二子者、用心覷矣。牛迄功名終、而子孫累葉貴盛。李挾高世之才振代之績、卒淪海島、非忌刻伎害之報耶。輒因是書、播告夫世之工譖愬者。」乞靈於果報、殊未足以鑒心。然觀李德裕所作『周秦行紀論』、至欲持此一文、致僧孺於族滅、則其陰譎險狠、可畏實甚。棄之者衆、固其宜矣。論猶在集(外集四)中、遂錄於後。

言發於中、情見乎辭。則言辭者、志氣之來也。故察其言而知其內、翫其辭而見其意矣。余嘗聞太牢氏(涼國李公嘗呼牛僧孺爲太牢。梁公名不便、故不書。)好奇怪其身、險易其行。以其姓應國家受命之讖、曰、「首尾三麟六十年、兩角犢子怒狂顛、龍蛇相鬪血成川」。及見著『玄怪錄』、多造隱語、人不可解。其或能曉一二者、必附會焉。縱司馬取魏之漸、用田常有齊之由。故自卑秩、至於宰相、而朋黨若山、不可動搖。欲有意擺撼者、皆遭誣坐、莫不側目結舌、事具史官劉軻『日曆』。余得太牢『周秦行紀』、反覆觀其太牢以身與帝王后妃冥遇、欲證其身非人臣相也、將有意於「狂顛」。及至戲德宗爲「沈婆兒」、以代宗皇后爲「沈婆」、令人骨戰。可謂無禮於其君甚矣。懷異志於圖讖明矣。余少服臧文仲之言曰、「見無禮於其君者、如鷹鷂之逐鳥雀也」。故貯太牢已久。前知政事、欲正刑書、力未勝而罷。余讀國史、見開元中、御史汝南子諒彈奏牛僊客、以其姓符圖讖。雖似是、而未合「三麟六十」之數。自裴晉國與余涼國(名不便)彭原(程)趙郡(紳)諸從兄、嫉太牢如讎、頗類余志。非懷私忿、蓋惡其應讖也。太牢作鎮襄州日、判復州刺史樂坤「賀武宗監國狀」曰、「閑事不足爲賀」。則恃姓敢如此耶。會余復知政

事、將欲發覺、未有由。值平昭義、得與劉從諫交結書、因竄逐之。嗟乎、爲人臣陰懷逆節、不獨人得誅之、鬼得誅矣。凡與太牢膠固、未嘗不是薄流無賴輩、以相表裏。意太牢有望、而就佐命焉、斯亦信符命之致。或以中外罪余於太牢愛憎、故明此論、庶乎知余志。所恨未暇族之、而余又罷。豈非王者不死乎。遺禍胎於國、亦余大罪也。倘同余志、繼而爲政、宜爲君除患。曆既有數、意非偶然、若不在當代、必在於子孫。須以太牢少長、咸置於法、則刑罰中而社稷安、無患於二百四十年後。噫。余致君之道、分隔於明時。嫉惡之心、敢辜於早歲。因援毫而摭宿憤。亦書「行紀」之跡於後。

論中所舉劉軻、亦李德裕黨。『日曆』具稱『牛羊日曆』、牛羊、謂牛僧孺、楊虞卿也、甚毀此二人。書久佚、今有輯本、繆荃孫刻之『藕香零拾』中。又有皇甫松、著『續牛羊日曆』、亦久佚。『資治通鑑考異』（卷二十）引一則、於「周秦行紀」外、且痛詆其家世、今節錄之。

太牢早孤。母周氏、治蕩無檢。鄉里云、「兄弟羞赧、乃令改醮」。既與前夫義絕矣、及貴、請以出母追贈。禮云、「庶氏之母死、何爲哭於孔氏之廟乎」。又曰、「不爲伋也妻者、是不爲白也母」。而李清心妻配牛幼簡、是夏侯銘所謂「魂而有知、前夫不納於幽壤、歿而可作、後夫必訴於玄穹」。使其母爲失行無適從之鬼、上罔聖朝、下欺先父、得曰忠孝智識者乎。作「周秦行紀」、呼德宗爲「沈婆兒」、謂睿眞皇太后爲「沈婆」。此乃無君甚矣。

蓋李之攻牛、要領在姓應圖讖、心非人臣、而「周秦行紀」之稱德宗爲「沈婆兒」、尤所以證成其罪。故李德裕既附之論後、皇甫松『續曆』亦嚴斥之。今李氏『窮愁志』雖尚存、（『李文饒外集』卷一至四、卽此、）讀者蓋寡。牛氏『玄怪錄』亦早佚、僅得後人爲之輯存。獨此篇乃屢刻於叢書中、使世間由是更知僧孺名氏。時世既遷、怨親俱泯、後之結果、蓋往往非當時所及料也。

趙景深『中國小說史略旁證』第十篇三〇頁云、「今皇帝先帝長子」、繫據『顧氏文房小說』本、而『唐宋傳奇集』則作「今皇帝名适、代宗皇帝長子」、是根據『太平廣記』卷四八九寫的、文義較勝。今皇帝指唐德宗。魯迅のこの部分の注（つまり「詳見『廣記』四百八十九」）は誤ってはいない。前掲「神邊小綴」で述べる通り『周秦行紀』のテキストは主に三種あって、『唐宋傳奇集』のこの部分は『李衛公外集』卷四に據っており、『史略』所引は『廣記』および『顧氏文房小說』に一致する。

5 惟僧孺既有才名、以至故沿其流波云

九一四

寫印本『大略』八云、小説亦如詩、至唐而一改進、雖大抵尙不出于搜奇記逸、然敘述宛轉、文辭華艷、發達之迹甚明。當時道釋二教、侈陳感通、有名位者、又好談神異、于是方士文人、聞風而作、競爲異記。牛僧孺有『玄怪錄』則李復言有『續玄怪錄』薛漁思有『河東記』（序云『續牛僧孺之書』）、段成式有『酉陽雜俎』而其友溫庭筠有『乾闥子』、高駢從事裴惲有『傳奇』、皆其例也。然文人于雜集成書而外、亦撰記傳、始末詳悉、往々孤行、今頗有存于『太平廣記』中者（他叢書所收、多臆題撰人顛倒時代不足據）、實唐代特有之作也。第八章冒頭の部分。

「小説の變遷」第三講云、再唐人の小説、不甚講鬼怪、間或有之、也不過點綴點綴而已。但也有一部分短篇集、仍多講鬼怪的事情、這還是受了六朝人底影響、如牛僧孺の『玄怪錄』、段成式の『酉陽雜俎』、李復言の『續玄怪錄』、張讀の『宣室志』、蘇鶚の『杜陽雜編』、裴鉞の『傳奇』等、都是的。然而畢竟是唐人做的、所以較六朝人做的曲折美妙得多了。

○李復言『續玄怪錄』

『新唐志』小説家類云、李復言續玄怪錄五卷。

『郡齋讀書志』卷一三小説類云、續玄怪錄十卷 右唐李復言撰、續牛僧孺書也。分仙術感應三門。三は二の誤。

『四庫提要』卷一四四小說家類存目二云、幽怪錄一卷續幽怪錄一卷 前略。末附唐李復言續錄一卷、考唐志及館閣書目、皆作五卷。通考則作十卷、云分仙術感應二門。今僅殘篇數頁、並不成卷矣。然志怪文書無關風教、其完否亦不必深考也。

續玄怪錄四卷 唐李復言撰。是書世有二本、其附載牛僧孺幽怪錄末者、蓋從說郭錄出。一卽此本、凡二十三事、與唐志卷數亦不符、蓋從太平廣記錄出者、雖稍多於說郭本、然亦非完帙也。

四卷本是宋刊本が残っており、四部叢刊續編本、續古逸叢書本がその景印である。同系統のテキストに琳琅秘室叢書本、隨龕徐氏叢書續編本があり、それらをもとに『廣記』から佚文を輯めた前掲10—2の中華書局本、上海古籍出版社本がある。著者についても未だ定説を見ず、近刊のテキストの前言や卞孝宣「李諒與『續玄怪錄』」(『唐代文史論叢』一九六・山西人民出版社)、李宗爲「李復言及其『續玄怪錄』考辨」(一九五・上海古籍出版社『中國古典戲曲小說論集』初集)等に考證がある。

『魯迅藏書目錄』叢書部雜叢類云、隨庵徐氏叢書續編 十種 徐乃昌輯 民國五年(一九一六)南陵徐氏影刻本 十二冊

○薛漁思『河東記』

『郡齋讀書志』卷一三小說類云、河東記三卷 右唐薛漁思撰。亦記譌怪事、序云續牛僧孺之書。袁本には著者名も序云々もない。

まとまったテキストはなく、『廣記』に三十三篇を引くほか、『紺珠集』卷七に「常持滿」一條を略引する。

○張讀『宣室志』

『舊唐書』卷一四九張薦傳云、張薦字孝舉、深州陸澤人。祖薦字文成。中略。薦自拾遺至侍郎、僅二十年、皆兼史館修撰。三使絕域、皆兼憲職。以博洽多能、敏於占對被選。有文集三十卷及所撰五服圖、宰相略、靈怪集、江左寓居錄等、並傳于時。子又新、希復、皆登進士第。中略。希復子讀、登進士第、有俊才。累官至中書舍人、禮部侍郎、典貢舉、時稱得士。位終尚書左丞。張薦の『靈怪集』は『新志』小説家に「張薦靈怪集二卷」と著録されるものである。

『新唐書』卷一六一張薦傳云、孫讀、字聖用、幼穎解。大中時第進士、鄭薰辟署宣州幕府。累遷禮部侍郎。中和初爲吏部、選牒精允。調者丐留二年、詔可、榜其事曹門。後兼弘文館學士、判院事、卒。

杜牧「牛僧孺墓誌銘」云、五男六女、中略。長女嫁戶部郎中上黨苗愔、次女嫁河中節度副使、檢校郎中范陽張洙、次女嫁河南府士曹、集賢校理常山張希復、次女嫁前進士鄧叔、次女未笄、一人始數歲。下略。牛僧孺の三女が張讀の母で、長女の婿、苗愔は『新唐書』宰相世系表五上によれば、『宣室志』の序を書いた曹台符の父である。従つて讀と曹台符とは從兄弟の關係になる。

『新唐志』三小説家類云、張讀宣室志十卷。

『郡齋讀書志』一三小説類云、宣室志十卷 右唐張讀聖朋撰。案原本翟鈔本作聖明、書錄解題作聖用、今據袁本通考改○先謙案舊鈔明。纂輯仙鬼靈異事、名曰宣室志者、取漢文召見賈生論鬼神之義、苗台符爲之序。

『直齋書錄解題』卷一小説家類云、宣室志十卷 唐吏部侍郎常山張讀聖用撰。案文獻通考聖用作聖朋。宣室者漢文帝問鬼神之處也。

『四庫提要』卷一四二小説家類三云、宣室志十卷補遺一卷 唐張讀撰。陳振孫書錄解題稱讀字聖朋、唐書藝文志載讀建中西狩錄十卷、註曰、讀字聖用。朋用字形相近、義亦通、未詳孰是也。深州陸澤人。舊唐書附見其祖張薦傳中、稱其登進士第、有俊材、累官至中書舍人、禮部侍郎、典貢舉、時稱得士、位終尚書左丞。新唐書藝文志、則稱爲僖宗時吏

部侍郎。高彥休唐闕史亦稱張侍郎讀爲員外郎、張休復之子、案舊唐書作希復。牛僧孺之外孫、年十九登進士第、不言其爲吏部禮部。以典貢舉之文證之、蓋新唐書爲誤矣。是書所記皆鬼神靈異之事、豈以其外祖牛僧孺嘗作玄怪錄、讀少而習見、故沿其流波歟。補遺一卷、舊本併題讀撰、然諸家書目皆無之。疑刊刻者撫他書所引載於後也。宣室之義、蓋取漢文帝宣室受釐、召賈誼問鬼神事、然鬼神之對、雖在宣室、而宣室之名、實不因鬼神。而立取以題誌怪之書、於義未當。特久相沿習不覺耳。今特附訂其失。庶讀者有考、無相沿用焉。『史略』が「字聖明」とするのは明らかに『郡齋讀書志』

衢州本によっている。衢州本注、『四庫提要』等の議論はあるが、『新唐書』本傳、藝文志二雜史類「張讀建中西符錄十卷字聖明、僖宗時吏部侍郎」からすれば『直齋書錄解題』が「聖用」とするのが正しいだろう。盧文弨の校本に「聖明」とするけれども。

『魯迅藏書目錄』叢書部雜叢類云、稗海 有七種 明商濬輯 明刻本 存十三冊 宣室志十卷附補遺 唐張讀撰。

『宣室志』のテキストには『四庫提要』にいう系統のが流傳している。明抄本即ち鐵琴銅劍樓舊藏本、いま北京圖書館藏本。『稗海』本。庫本。筆記小說大觀本。叢書集成初編本。それらをもとに他の諸書から佚文を輯めたのが中華書局排印本（一九三三・古小說叢刊）である。

『師弟答問集』一四頁云、〔魯迅答曰〕、(3)115頁、分仙術感應二門 仙術ト感應トノ二類ニ分ス。(4)116頁、清四庫提要子部小說家類、清四庫全書提要ノ中ノ子部小說類ナリ。其ノ提要ハ中ニ經、史、子、集ノ四部（所謂「四庫」）ニ分チ、每部ノ中ニ又各類アリ。

「世遂盛傳。」の句點は訂正版からのもので、それまでは「・」であった。「亦不鮮」異體字だが新版『全集』で替えられたもので、それまではすべて「尠」に作る。「又有撰『宣室志』十卷」「又」字は鉛印本になく、初版で加えられた。



6 他如武功人蘇鶚、以至以傳奇爲骨者也

寫印本にはここに該當する部分はない。鉛印本では「雖間有實錄」の「有」を「見」に作る他は『史略』と同じ。

○蘇鶚『杜陽雜編』

『新唐志』小説家類云、蘇鶚『演義』十卷、又『杜陽雜編』三卷。字德祥、光啓中進士第。

『郡齋讀書志』卷二小説類云、杜陽雜編三卷 右唐蘇鶚撰、字德祥。光啓中進士、家武功杜陽川。雜錄廣德以至咸通時事。

『四庫提要』卷一四二小説家類三云、杜陽雜編三卷 唐蘇鶚撰。鶚有演義、已著錄。〔雜家類〕此編所記、上起代宗廣德

元年、下盡懿宗咸通十四年、凡十朝之事、皆以三字爲標目。其中述奇技寶物、類涉不經。大抵祖述王嘉之拾遺、郭子橫之洞冥。雖必舉所聞之人以實之、殆亦俗語之爲丹青也。所稱某物爲某年某國所貢者、如日林大林文單吳明拘弭大軫南昌湖東條支鬼谷河陵兜離、唐書外國傳皆無此名。諸帝本紀亦無其事、卽如夫餘國久併於渤海大氏、而云武宗會昌元年夫餘國來貢、闕實地接蔥嶺。漢書唐書均有明文、而云在西海、尤舛迕之顯然者矣。然鋪陳縝密、詞賦恒所取材、固小說家之以文采勝者、讀者挹其葩藻、遂亦忘其夸飾、至今沿用、殆以是與。其曰杜陽雜編者、晁公武讀書志謂、鶚居武功之杜陽、蓋因地以名其書云。テキストには稗海本、庫本、學津討原本、中華書局本等があり、みな同系統のものである。

『魯迅藏書目錄』叢書部雜叢類云、稗海 存七種 明刻本 杜陽雜編三卷 唐蘇鶚撰。

○高彥休『唐闕史』

『新唐志』小説家類云、高彥休闕史三卷。

『直齋書錄解題』卷二小説家類云、唐闕史三卷 唐高彥休撰。自號參寥子、乾符中人。

『四庫提要』卷一四二小說家類三云、唐闕史二卷 舊題唐高彦休撰。彦休始末未詳。書中鄭少尹及第一條、有開成二年愚江夏伯祖再司文柄語。考舊唐書高潛傳、錯於大和三年以吏部員外郎奉詔審定敕試別頭進士明經、開成元年以中書舍人權知禮部貢舉、尋爲禮部侍郎、掌貢部者三年、出爲鄂岳觀察使而卒。鄂岳正江夏之地、所言官品事蹟俱合、則彦休當爲錯之從孫。惟新舊書皆失錯之里籍、遂不知彦休爲何地人耳。陳振孫書錄解題曰、彦休自號參寥子。唐藝文志註亦同。宋史藝文志載闕史一卷、註曰參寥子述。又載高彦休闕史三卷、分爲兩書兩人、殊爲舛誤。又黃伯思東觀餘論有此書跋云、叙稱甲辰歲編次。蓋僖宗中和四年、而其間有已書僞號者、或後人追改之。今考序中自言乾符甲子生、乾符無甲子、當爲甲午之譌、下詎中和四年僅十年、不應即能著書。由是以後惟晉開運元年爲甲辰。上推乾符元年甲午生、年當七十一歲、尙有著書之理。然則彦休蓋五代人也。是書諸家著錄皆三卷、今止上下二卷、似從他書鈔撮而成、非其原本。張耒宛丘集稱賈長卿嘗辨此書所載白居易母墮井事、此本無之。是亦不完之一證。然自序言共五十一篇、分爲上下二卷、又似非有脫遺者。或後人併追改其序歟。王士禛居易錄譏其首載李師道之黨丁約獻俘闕下臨刑幻化仙去事以爲導逆、其說甚當。然所載如周墀之對文宗、鄭薰判宦官之廢子、盧攜之議鎮州、皆足與史傳相參訂。李可及戲論三教一條、謂伶人不當授官、持論尤正。他如皇甫湜作福先寺碑、劉蛻辨齊桓公器、單長鳴非姓單諸事、亦足以資考證、不盡小說荒怪之談也。高彦休の始末については余氏の『辨證』に崔致遠『桂苑筆耕錄』等を引いて詳しい考證があり、乾符甲午には二十一歳で進士に擧げられ、五代人ではなく確かに唐人であると、『提要』の誤を訂している。テキストには庫本、知不足齋叢書本、說庫本等がある。

#### ○康駢『劇談錄』

『新唐志』小說家類云、康駢劇談錄三卷 字駕言、乾符進士第。

『郡齋讀書志』卷一三小說類云、劇談錄三卷 右唐康駢字駕言撰。乾符中登進士第。書咸載唐世故事。

『四庫提要』卷一四二小説家類三云、劇談錄 唐康駢撰。王定保撰言作唐駢、蓋傳寫之譌。唐書藝文志作康駢、以其字駕言證之、二字義皆相合。未詳孰是。諸書引之皆作駢、疑亦唐志誤也。駢池陽人、乾符四年登進士第、官至崇文館校書郎。是書成於乾寧二年、皆記天寶以來瑣事、亦間以議論附之、凡四十條。今以太平廣記勘之、一一相合。非當時全部收入、卽後人從廣記鈔合也。此本末有臨安府陳道人書籍鋪刊行字。蓋猶影鈔宋本。如潘將軍一條、註中疑爲潘鵠律字、今本劍俠傳、從廣記剽掇此條、譌爲潘鶴碎、遂不可解。知此本爲善矣。其中載元微之年老擢第執贊謁李賀一條、古夫于韋維錄辨之曰、案元擢第既非遲暮、於賀亦稱前輩、詎容執贊造門、反遭輕薄、小說之不稱如此。其論最當、然稗官所述、半出傳聞、眞僞互陳、其風自古、未可全以爲據、亦未可全以爲誣、在讀者考證其得失耳。不以是廢此一家也。

「康駢」の「駢」たるべきことについて余氏『辨證』に考證がある。テキストは津逮秘書本、庫本、學津討原本、中華書局本があり、いずれも同系統のものである。

#### ○孫榮『北里志』

『郡齋讀書志』卷一三小説類云、北里志一卷 右唐孫榮撰。記大中進士遊狹邪雜事。孫光憲言榮之意在譏虛相攜也。蓋攜之女與其甥通、攜知之、遂以妻之、殺家人以滅口云。『全唐詩』の小傳には「孫榮、字文威、自號無爲。歷官御史、翰林學士、中書舍人。詩六首」とある。『新唐書』宰相世系表三下、安邑の孫氏に「榮字文威、中書舍人」とあり、孫逖四代の裔であることが分る。『舊唐書』卷

一九〇、孫逖傳では「潞州涉縣人」とする。他に「唐才子傳」卷九趙光遠の項に「有孫啓、崔珏、同時恣心狂狎、相爲唱和、頗陷輕薄、無退讓之風」とあり、若年のころは輕薄の才子であった。『北里志』のテキストは古今說海本、古典文學出版社本（一九五七）がある。

#### ○范攄『雲溪友議』

『新唐志』小説家類云、范攄雲溪友議三卷 咸通時。自稱五雲溪人。

『郡齋讀書志』卷二三小說類云、雲谿友議三卷 右唐范攄撰。記唐開元以後事。攄、五谿人、故以名其書。

『四庫提要』卷一四〇小說家類二云、雲谿友議三卷 唐范攄撰。攄始末未詳。唐書藝文志註稱爲咸通時人、而書中李涉贈

盜詩一條、稱乾符已丑歲客於雪川親見李博士手蹟。考乾符元年爲甲午、六年爲己亥、次年庚子改元、廣明中間無己丑。

已丑實爲咸通十年、疑書中或誤咸通爲乾符、否則誤己亥爲己丑。然總之僖宗時人矣。攄自號五雲谿人、故以名書。五

雲谿者若耶溪之別名也。其書世有二本、一分上中下三卷、每條各以三字標題、前有攄自序。一爲商濬稗海所刻、作十

二卷、而自序及標題則並失之。案陳振孫書錄解題已稱唐志三卷今本十二卷、則南宋已有兩本矣。宋史藝文志作十一

卷、則刊本誤二爲一也。此爲秦與季振宜家所藏三卷之本、較商氏所刻爲完善。所錄皆中唐以後雜事。中略。六十五條

之中、詩話居十之七八、大抵爲孟榮本事詩所未載、逸篇瑣事頗賴以傳。又以唐人說唐詩、耳目所接、終較後人爲近。

故考唐詩者、如計有功紀事諸書、往往據之以爲證焉。テキストは『四庫提要』がいう十二卷本に稗海本があり、三卷本には明刊本即四

部叢刊續編本、庫本、嘉業堂叢書本、古典文學出版社本（一九五七）等がある。三卷本と十二卷本とは収録項目は同数だが、『四庫提要』の述べ

るちがいのほか、文章自體にも異同がある。なお余氏『辨證』は范攄の籍貫を『唐詩紀事』卷七十一「吳人范攄處士之子」という記事によって會稽

ではなく吳であらうとする。

## 7 追裴鏘著書、以至所謂文人者所樂道也

『新唐志』小説家類云、裴鏘傳奇三卷 高駢從事。

『郡齋讀書志』卷二三小說類云、傳奇三卷 右唐裴鏘撰。唐志稱鏘高駢從事、故其書所記皆神仙恢謠事。駢之惑呂用之、

未必非鏘輩道誤所致。

『直齋書錄解題』卷二二小說類云、傳奇六卷 唐裴鏘撰。高駢從事也。尹師魯初見范文正岳陽樓記曰、傳奇體爾。然文體

隨時、要之理勝爲貴、文正豈可與傳奇同日語哉。蓋一時戲笑之談耳。唐志三卷、今六卷、皆後人以其卷帙多而分之也。

テキストは佚失以來民國になるまで收集されず、吳曾祺が『舊小説』に十三條を収めたのが初めてで、後鄭振鐸輯本の『世界文庫』本があり、最近には王夢鷗『唐人小説研究』（民國六〇）に三十篇、周楞伽『裴劍傳奇』（一九八〇）に三十一篇が輯められた。いずれも『廣記』が主なソースで、魯迅が見たのは『廣記』に「傳奇」と題する二十八篇であらう。なお王、周兩氏の書にはともに詳細な考證がある。

『唐詩紀事』卷六七云、裴劍 乾符五年、劍以御史大夫爲成都節度副使。題石室詩曰、文翁石室有儀形、庠序千秋播德馨。古柏尙留今日翠、高岷猶藹舊時青。人心未肯拋羶蟻、弟子依前學聚螢。更歎沱江無限水、爭流祇願到滄溟。時高駢爲使、時亂矣、故劍詩有願到滄溟之句、有微旨也。劍作傳奇、行於世。

『全唐文』卷八〇五云、劍、咸通中爲靜海軍節度高駢掌書記。加侍御史內供奉。後官成都節度副使。加御史大夫。高駢の行狀は新舊唐書の傳に詳しい。ただ、裴劍が高駢の淮南節度副大使時代以後までその配下にあったかどうかは諸説の分かれるところである。

胡應麟『少室山房筆叢』卷四一莊嶽委談下云、傳奇之名、不知起自何代。陶宗儀謂唐爲傳奇、宋爲戲評、元爲雜劇、非也。唐所謂傳奇、自是小説書名、裴劍所撰。中如藍橋等記、詩詞家至今用之。然什九妖妄寓言也。裴晚唐人、高駢幕客、以駢好神仙、故撰此以惑之。其書頗事藻繪、而體氣俳弱、蓋晚唐文類爾。然中絕無歌曲樂府。若今所謂戲劇者、何得以傳奇爲唐名、或以中事跡相類、後人取爲戲劇張本、因展轉爲此稱不可知。范文正記岳陽樓、宋人譏曰傳奇體、則固以爲文也。

『劍俠傳』については『史略』第十一篇、吳淑の記述の項をも参照。『劍俠傳』が王世貞の編にかかるであろうことは余嘉錫『四庫提要辨證』卷一九に『弇州山人四部彙』卷七一に收める「劍俠傳小序」を引いての考證に詳しい。王世貞が編纂した『劍俠傳』が刊本になったかどうかは分らないが、それはおそらく吳琯が萬曆年間に刻し『古今逸

『史』に収めた四卷本の藍本であろう。この四卷本のテキストは清の汪士漢の編んだ『秘書二十一種』も含めて著者を明示しない。また重校『說郛』に収録された一卷本も『五朝小説』本までは闕名のままである。ところが魯迅の憎惡して已まない陳蓮塘編の『唐人說薈』（『魯迅全集』第八卷集外集拾遺補編「破」唐人說薈）（参照）本になつてはじめて「唐段成式撰」と標記する。それは乾隆中の刊行だとされる。以下『唐代叢書』、『龍威秘書』、『藝苑摺華』、『說庫』各本みなそれを襲う。蓮塘居士が「段成式撰」としたのは一卷本十二篇のうち四篇までが『西陽雜俎』から採つたものであることからそうしたのであらう。たしかに杜撰にはちがいない。だが魯迅が偽作を明人のせいにしたのはぬれぎぬであつて、ここの記述は少しく訂正しなければならない。なおまた「聶隱娘傳」一篇を収録した『古今說海』も著者を言わない。『古今說海』は「序」が「嘉靖甲辰」（二三年、西紀一五四四年）だから王世貞の『劍俠傳』よりはおそらく少し早いだろう。最近の研究では、「聶隱娘」の出處を『廣記』は「傳奇」とするが、これは『廣記』の誤記であつて、楊儀の輯本『甘澤謠』に収める「聶隱娘」の方が本來の姿であり、この一篇は『甘澤謠』のもとしなければならないという説がある。李宗爲「唐代傳奇『聶隱娘』『虬髯客』作者辨」（元公・上海古籍出版社『中國古典戲曲論集』二集）。

なお一節の末に「迄今猶爲所謂文人者所樂道也」とあるのは必ずもとづく所があるにちがいないが、まだ調べがつかない。

#### 8 段成式柯古、以至足副其目也

鉛印本は『史略』と變るところがない。

『新唐書』卷八九段志玄傳云、段志玄、齊州臨淄人。中略。三世孫文昌。中略。憲宗數欲親用、頗爲韋貫之奇詆、偃蹇不

得進。貫之罷、引爲翰林學士、遷中書舍人、遂爲承旨。穆宗卽位、屢召入思政殿顧問、率至夕乃出。俄拜中書侍郎、同中書門下平章事。中略。子成式字柯古、推蔭爲校書郎。博學強記、多奇篇秘籍。侍父于蜀、以畋獵自放、文昌遣吏自其意諫止。明日以雉兔徧遺幕府人、爲書、因所獲饌前世事、無複用者、衆大驚。擢累尙書郎、爲吉州刺史、終太常少卿。著西陽書數十篇。後略。

『西陽雜俎』續集卷五寺塔記序云、武宗癸亥三年夏、予與張君希復善繼、同官秘丘鄭君符夢復、連職仙署。會假日、遊大興善寺。因問南京新記及遊目記、多所遺略、乃約一句尋兩街寺。以街東興善爲首、二記所不具、則別錄之。遊及慈恩、初知官將併寺、僧衆草草、乃泛問一二上人及記塔下畫跡、遊於此遂絕。後三年、予職於京洛。及刺安成、至大中七年歸京、在外六甲子、所留書籍、揃壞居半、於故簡中睹與二亡友遊寺、瀝血淚交、當時造適樂事、邈不可追。復方刊整、纔足續穿蠹、然十亡五六矣。次成兩卷、傳諸釋子。東牟人段成式、字柯古。ここに「東牟人」というのは新舊『唐書』が「臨淄人」とするのは合わない。しかし本人が自稱し、また息子の段公路「北戸錄」の序を書いた陸希聲がその中で「東牟段君公路」と述べるからには據るところがあるのだろう。なお張希復は「宣室志」の張讀の父であり、自身も「靈怪集」の著がある。

尉遲樞『南楚新聞』「太平廣記」卷三五一云、太常卿段成式、相國文昌子也。與學子溫庭筠親善、咸通四年六月卒。庭筠居閑輦下、是年十一月十三日冬至、大雪。凌晨有扣門者、僕夫視之、乃隔扉授一竹筒、云、段少常送書來。庭筠初謂誤、發筒獲書、其上無字、開之、乃成式手札也。庭筠大驚、馳出戶、其人已滅矣。乃焚香再拜而讀。但不諭其理。辭曰、慟發幽門、哀歸短數。平生已矣、後世何云。況男紫悲黃、女青懼綠。杜陵分絕、武子成羣。自是井陘流鸚、庭鍾舞鶴。交昆之故、永斷私情。慨懷所深、力占難盡。不具。荊州牧段成式頓首。自後寂無所聞。書云羣字、字書所無、以意讀之、當作羣字耳。溫段二家、皆傳其本。子安節、前沂王傅、乃庭筠壻也。自說之。

○『廬陵官下記』

『新唐志』小說家類云、段成式西陽雜俎三十卷 廬陵官下記二卷。

『直齋書錄解題』卷二一小說家類云、廬陵官下記二卷段成式撰。爲吉州刺史時也。『類說』卷六に六條が略引される。

○『西陽雜俎』

『新唐志』既出。

『郡齋讀書志』卷一三小說類云、西陽雜俎二十卷續西陽雜俎十卷 右唐段成式撰。自序云、縫掖之徒、及怪及戲、無侵

於儒。詩書爲太羹、史爲折俎、子爲醢醢。大小二西山多藏奇書、故名篇曰西陽雜俎。分三十門、爲二十卷。其後續十卷。

『直齋書錄解題』卷二一小說家類云、西陽雜俎二十卷、續十卷 唐太常少卿臨淄段成式柯古撰。所記故多譌怪、其標目

亦奇詭、如天咫玉格壺史貝編尸窰之類。成式、文昌之子。いま通行する諸本には、前集二十卷のみで續集のない稗海本と、前・續揃

った三十卷の趙琦美校勘の脈望館本、それを景印した四部叢刊本、津逮秘書本、その日本覆刻の元祿刊本、庫本、學津討原本、崇文書局本、湖北

先正遺書本等がある。

『西陽雜俎』周登後序云、右『西陽雜俎』二十卷、唐段成式少卿所撰也。余舊不識此書、惟見諸家詩詞多引據其說。

及假來此、以其書之所名者訪焉、則無有也。郡博士管君容成偶得之、以示余。其書類多仙佛詭怪、幽經祕錄之所出。

至於推析物理、「器奇」、「藝絕」、「廣動植」等篇、則有前哲之所未及知者。其載唐事、修史者或取之。按唐史、成式

世居青徐、齊襄公志玄四世孫、宰相文昌子也。文昌少客荊州、西陽、荆之屬、成式豈嘗寓游于此耶。余聞方輿記云、

昔秦人隱學於小西山石穴中、有所藏書千卷。梁湘東王尤好聚書、故其賦曰、「訪西陽之逸典。」或者成式以所著書有



異乎世俗、故取諸逸典之義以名之也。然自唐以前、雜家小説、今既不得、而瑣碎之觀、未有近于此者、詎可棄之而不存乎。且其書以酉陽名、而客之過此者、未嘗不以是書爲問也。因刻之於此、以備客對。

望、永康周登書。

嘉定七權甲戌十月既

胡應麟『少室山房筆叢』卷三二西綴遺上云、段成式酉陽雜俎所列目、天咫、玉格、壺史、貝編等、宋人以下、亡弗駭其異、而未有得其說者。蓋必以出處求之、而不知段氏本書、謂之酉陽雜俎。夫諸目之義、吾未能詳。至雜俎必係酉陽、則五車之中、斷可自信矣。又如目中忠志禮異等詞、皆文人口語、曷嘗拘拘出處耶。今考天咫所談七曜事、則天闕之義也。玉格所談二典事、則玉檢之文也。壺史悉紀道術、非壺中之史耶。貝編咸錄釋門、非貝葉之編耶。卽全語未見所出、意義咸自可尋。後人徒以虛名、爲其愚弄、故拈及之。「諸舉」については貝曾の『能改齋漫錄』五に、姚寬の『西溪叢語』を引いての議論があり、胡應麟もそれを承けて前引の文の後に意見を述べている。また近人では余嘉錫が『四庫提要辨證』一八子部九の最後に自己の見解を附けている。

9 所引『酉陽雜俎』、以至與傳奇并驅爭先矣

九四十三

鉛印本は「柳氏」の項、「士人祥齋日暮」と「日、暮」の間で句讀を切らない他は『史略』と變らない。「玄奘」の「匙箸」、「柳氏」の「胡蜂繞其首面」「玩之掌中」の「箸」「繞」「玩」は、鉛印本『大略』以來五七年版全集に至るまで、異體の「筋」「遶」「翫」に作る。新版『全集』で改められた。「五相」の「光覆身」は五七年版のみ「復」に作り、「生希有心」を三八年版は「先」に誤る。また「柳氏」の「已如盤矣。」の句點は訂正版以降で、それまでは讀點になっている。

「玄奘」の「中天寺」、鉛印本から「寺」字が添えられているが、各本いずれも「寺」字は重複しない。「中天」は

「中天竺」と考えられるから、「寺」字は添えるに及ばない。「張堅」の「劉、天翁」、各本「天、劉翁」に作るが、これは魯迅が意を以て改めたものであろう。かれがこれらの引用をどのテキストに據ってなしたのかは特定できない。

「爲世愛玩」の「玩」字、三版から七版まで偏を「習」とし旁を「羽」とする字に誤る。

『師弟答問集』一四頁云、「魯迅答曰」、(5)117頁 邵公 周武王ノ時ノ人、周公ノ弟ナリ

(6) a 季札 春秋ノ時、吳國ノ太子、道德ノ高ヲ以ツテ稱セラル、

b 三官書 道士ノ出鱈目デスカラ明確ニ云ヘナイ。三官ヨリ發セラレタル書（命令）デシヨウ。

c 九宮モ天界ノ宮殿ノ名、其ノ中ニ小イ宮殿ガ九アルヨ一ダ。

(6)118頁 a 五印Ⅱ唐ノ時ニ印度ガ五部ニワカツテ居ルト云フノダカラ五印ト云フ。

“嘗至中天寺……輒膜拜焉”マデ金剛三昧ノ話。

b 寺中多畫……ハ、麻屨及ヒ匙、筭。玄奘ノ像デハナイ。

c 蓋西域所無者ハ麻屨及匙筭。

d 齋日ハ印度坊様ノ齋日（寺ニハ毎月、何日カノ齋日ガアルデシヨウ、其日ニアラユル坊様ニ食ハセル。シ

カシイツカハ知リマセン。）

増田譯「支那小説史」注に、「季札。春秋時代の人、吳國の太子。……九宮。これも道家のでたらめだが、天界の宮殿で、九部の小宮殿からなるものやうだ。」「五印。印度のこと、印度は五部に分れてゐた。」等は、魯迅のこの返信を承けている。「五印」について魯迅は若年の作「中國地質略論」で「嗚呼、此一細事、而令吾悵、令吾悲、吾蓋見五印詳圖、曾招颺于倫敦之肆矣」と書いている。

10 成式能詩、以至聊資笑噱而已

鉛印本は、「簡率」を「拙率」に作る他は『史略』に同じ。これは初版で「簡率」に改められた。

『魯迅全集』第九卷『史略』注云、「三十六體」『新唐書・文藝傳』「商隱初爲文瑰邁奇古、及在令狐楚府、楚本工章奏、因授其學。商隱儼偶長短、而繁褥過之。時溫庭筠、段成式俱用是相夸、號“三十六體”」。又宋王應麟『小學紺珠』云、三人排行皆第十六、故有此稱。『新唐書』二〇八、「小學紺珠」卷四。又た『唐詩紀事』卷五三、李商隱の項にも同じことを述べる。

### ○溫庭筠『乾牋子』

『新唐志』小說家類云、溫庭筠乾牋子三卷。

『郡齋讀書志』卷十三小說類云、乾牋子三卷 右唐溫庭筠撰。序謂語怪以悅賓、無異牋味之適口、故以乾牋命篇。

『直齋書錄解題』卷二一小說家類云、乾牋子三卷 唐溫庭筠撰。序言不爵不觥、非無非炙、能悅諸心、聊甘衆口、庶乎乾牋之義。牋與餽同字、從肉見古禮經。

胡應麟『少室山房筆叢』卷三五「西轍遺上」云、成式子安節著樂府雜錄、今傳。安節娶溫庭筠女。庭筠著甘牋子、序謂語怪說賓、猶甘牋悅口。與雜俎義正同、然前人無此說也。非庭筠自序、至今不知何謂、亦以爲天恩貝編矣。テキストは伏して、いま『廣記』に三十二條見え、『紺珠集』卷七に二十條略引される。

溫庭筠の傳は『舊唐書』卷一九〇文苑傳、『新唐書』卷九〇に見え、その他『唐詩紀事』卷五四、『唐才子傳』卷八に記述がある。

### ○『義山雜纂』

『直齋書錄解題』卷二一小說家類云、雜纂一卷 唐李商隱義山撰。俚俗常談鄙事、可資戲笑、以類相從。今世所稱殺風景、蓋出於此。又有別本稍多、皆後人附益。

『文獻通考』經籍卷四二子部小說類云、巽巖李氏曰、用諸酒杯流行之際、可以善諍。其言雖不雅調、然所詞諄多中俗病。聞者或足以爲戒、不但爲笑也。

「破『唐人說薈』」【全集】第八卷集外集拾遺補編云、前略。我現在略舉些他那胡鬧的例。中略。四是亂改句子。如『義山雜纂』中、頗有當時的俗語、他不懂了、便任意的改纂。下略。

書信：章廷謙二六〇七四【全集】第一卷云、矛塵兄 來信已到。『唐人說薈』如可退還、我想大可以不必買、編者「山陰蓮塘居士」雖是同鄉、然而實在有點「仰東顧殺」、所收的東西、大半是亂改和刪節的、拿來玩玩、固無不可、如信以爲眞、則上當不淺也。近來商務館所印的『顧氏文房小說』、大概比他好得多。『唐人說薈』裏的『義山雜纂』、也很不好。我有從明抄本『說郭』（刻本『說郭』、也是假的）抄出的一卷、好得多、內有唐人俗語、明人不解、將他改正、可是改錯了。如要印、不如用我的一本。後面有宋人續的兩種、可惜我沒有抄、如也印入、我以爲可以從刻本『說郭』抄來、因爲宋人的話、易懂、明人或者不至于大改。 迅 七・十四

テキストは明抄『說郭』本（涵芬樓排印本）と『古今說海』本の二系統が傳つており、宛委山堂『說郭』本、『五朝小說』本などは後者の系統である。明代のテキストは兩系ともに「續」「二續」と合せて三卷本であつたらしく、それが『五朝小說』に至つて各時代に配屬され直したと考えられる。近くは前の三部をまとめたうえ新たに同類の書を加えた章廷謙編『雜纂四種』（二六・北新書局）、曲彥斌編注『雜纂七種』（二九・上海古籍出版社）がある。

#### 11 所引『義山雜纂』

趙景深『中國小說史略旁證』一〇、三三頁云、20. 『義山雜纂』引文校涵芬樓本『說郭』。「松下喝道」作「花間喝道」、「步行將軍」作「妓筵說俗事」、「背山起樓」與「果園種菜」互易、沒有「對衆倒臥」四字、十誠次序全異、用字亦多

不同、如「不得開人家書」作「私書」、「不得戲取物不令人知」作「不言」、「不得暗黑獨自行」作「黑暗獨行」、「不得與無賴子弟往還」無「弟」字、「不得借人物用了經旬不還」無「了」字。『史略』が引用するのは章廷謙宛ての書信がいうように正しく明抄『說郭』からの抄録本に據っているものであつて、それは「涵芬樓本」と正確に一致する。趙氏は「古今說海」本ないしは宛委山堂『說郭』本というべきところを逆に誤つたのであらう。その二本との校勘は趙氏の擧げる通りである。なお加えるならば、「古今說海」系は「十誠」を項目として立てず、「無見識」の中にくるめ、且つ「不得暗黑處驚人」「不得陰損于人」の二句を缺く。

## 12 中和年間、以至爲黃允交

六十三

「孫內翰北里誌序」云、時中和甲辰歲、無爲子序。古典文學出版社本。中和甲辰は僖宗中和四年、西紀八八四年。無爲子は孫棨の號。『北里志』王團兒云、王團兒、前曲自西第一家也。昨車駕反正、朝官多居此。己爲假母、有女數人。長曰小潤、字子美、少時頗籍籍者。小天崔垂休、名微、本字似之、及第時二十。變化年溺惑之、所費甚廣。嘗題記於小潤牌上、爲山所見、名就令、字哀求、近白小求、宰臨晉。贈詩曰、慈恩塔下親泥壁、滑膩光華玉不如。何事博陵崔四十、金陵腿上逞歐書。垂休本第四十、後改爲四十一、卽崔四十崔相也。後略。』古典文學出版社本。

明抄『說郭』卷二引『北里志』云、王團兒有假女數人、長曰小潤、字子美、少時頗籍籍者。崔垂休常題記于小潤牌上、爲同年李義山所見、贈之詩曰、慈恩塔上新泥壁、滑膩光華玉不如、何事博陵崔四十、金陵腿上逞歐書。魯迅は『北里志』二本を合せて『史略』の記述の如くした。李商隱は大中十二年（西紀八五八）に亡くなったから、『北里志』の李義山とは別人である。『北里志』のこの記事の主人公崔垂休つまり崔胤は、唐王朝を朱全忠に賈渡したことで惡名高い宰相で、『舊唐書』一七七、『新唐書』一二三下姦臣傳に傳がある。『舊唐書』では崔胤の進士及第を乾寧二年（西紀八九五）とするが、その續きで「大順中（西紀八九〇—九二）歷兵部、吏部二侍郎、尋以本官同平章事」と述べて、傳自體すでに矛盾しており、あてにならない。徐松の『登科記考』卷三三は『舊唐書』一七八張勳傳の「崔允擅朝政、與尉同年進士、尤相善」を引いて張文蔚が及第した乾符二年（西紀八七二）に繋げる。したがってこの李義山の登第も乾符二年ということになる。また文中「嘗（常）

題記之云」というのは乾符二年登第と考え合せて、やはり乾符中のことであつたろう。乾符に續く次の中和年間には黄巢の亂が全國を席卷して、僖宗は中和元年から四川成都へ蒙塵の身であつたから、官吏はみな成都へ隨從するか、各藩鎮の下へ出向くかしてすでに北里どころの騒ぎではなかつた。孫榮が『北里志』の序を記めた中和四年は、黄巢が敗れ、亂はいちおう平靜に向いつつあつたが、僖宗はまだ長安に戻れない情況にあつた。孫榮、かれも遊治郎の一人であつたが、成都かどこかで長安を追懷して『北里志』及び序を綴つたのだらう。『唐語林』卷七にも「翰林學士孫榮北里志記乾符事」という。もう一人の李義山については魯迅のいうように以上の「他に顯證がない」。ただ『雜纂七種』の校注者曲彥斌はその作者考略で次のように言う。「〔『雜纂』三續〕有題識云、『李義山、浪子、以巷談寓滑稽。王君玉、蘇子瞻各仿之。遂成風流雅譜。後有續者、不免畫足、寧復遺珠。徒爲大雅罪人、未必能博好談士一軒渠也。』王子下第、出白門車中識。」各本均有此題識。然不可斷定卽爲黃允交自題、亦無他人所題之證。其中稱李義山爲「浪子」者、或是魯迅先生推測『義山雜纂』可能非商隱所作之由、而聯及『北里志』所載亦號義山之李就今。」ついでに引用の『北里志』に注釋を加えるならば、『古今說海』の保存する注文は、ずっと後になってから添えられたものである。崔胤が宰相になるのは『資治通鑑』に據れば、昭宗景福二年（西紀八九三）「九月壬辰、御史中丞崔胤爲戶部侍郎同平章事」とあるから、注の「崔四十郎崔相也」という表記はそれ以後でなければならぬ。そして崔胤が李全忠の手にかかつて殺されるのは唐の亡ぶ天祐四年（西紀九〇七）正月だから、上の注記は天福二年（八九三）から天祐四年（九〇七）の間になされたものと考えるのが妥當だらう。さらに同注内に「昨車駕反正」とあることから、西紀八九三—九〇七間の反正を見るならば、光化元年（八九八）の華州からの歸還と、天復三年（九〇三）の鳳翔からの歸京との二度があり、この間昭宗は世紀末の混亂に逐われてたえず蒙塵を繰返していたわけである。反正の年代が確定されれば注記の時期はその翌年ということになり、光化二年（八九九）か天祐四年（九〇七）正に唐滅亡の年ということになる。同書の他の文の注には「今左史劉郊文崇〔魯〕」などというのがあって確定できない要素も含まれているけれども、要するに正文と注には時間の差があることは確かである。そしてこの注もおそらくは本文の撰者の手になつたと考えてよさそうに思われる。

『全集』第九卷『史略』注云、王君玉 宋代王君玉有兩人。『四庫全書總目提要』著錄、『國者談苑』二卷、舊本題夷門隱叟王君玉撰。又『宋志・王珪傳』載、珪從兄珪字君玉、成都華陽人、仁宗時任館閣校勘・集賢校理。『雜纂續』一卷、

作者當爲兩人中之一人。明抄の『說郭』及び『古今說海』はともに『續』の撰者を宋王君玉とするが、宛委山堂本『說郭』は王銍の撰とする。王銍は字を性之とするから、これは章廷謙の『雜纂四種』が言うように撰者の可能性はおそらくないだろう。曲彦斌『雜纂七種』作者考略は「宋人王度亦字君玉、會稽人。學于葉適、以太學上舍人對、暢言當世要務、以此失上第、教授舒州、後遷太學博士。將召對、益欲發舒、以疾卒。」（中國人名大辭典）ともう一人の作者の可能性を舉げる。しかし『雜纂續』を讀んでみると、當世の要務を暢言して落第した人の作とも思えない。要するに作者については未詳である。

『二續』までは上記明抄『說郭』に據る。『三續』についても宛委山堂本『續說郭』、『五朝小説』に收録されることが知られるのみで、他に著録はない。『續說郭』の標題から撰者は歙縣の人と知れ、題跋が撰者の作なら文中「壬子下第、出白門車中識」という語から江南鄉試の落第者だということが分るのみである。明初壬子の年には南京での進士の試験はなかったからである。